四国防災八十八話

第七十五話　四国の水がめ　・第七十八話　土びん水・第七十九　番水と香箱

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：青江　美乃里（愛媛大学美術研究会）

香川県に讃岐平野というところがあります。見渡すと・・・

太　　郎：ため池が多いね！

そうです。何故でしょう？
この辺りは雨が少なく、水が足りなくなるので、
ここへ田んぼに使う水などをためておくのです。

太　　郎：なるほどー

しかし、ここでは昔から、ため池だけじゃ駄目なほど
何度も渇水が起きています。
その度に色々な工夫がされてきたのです。

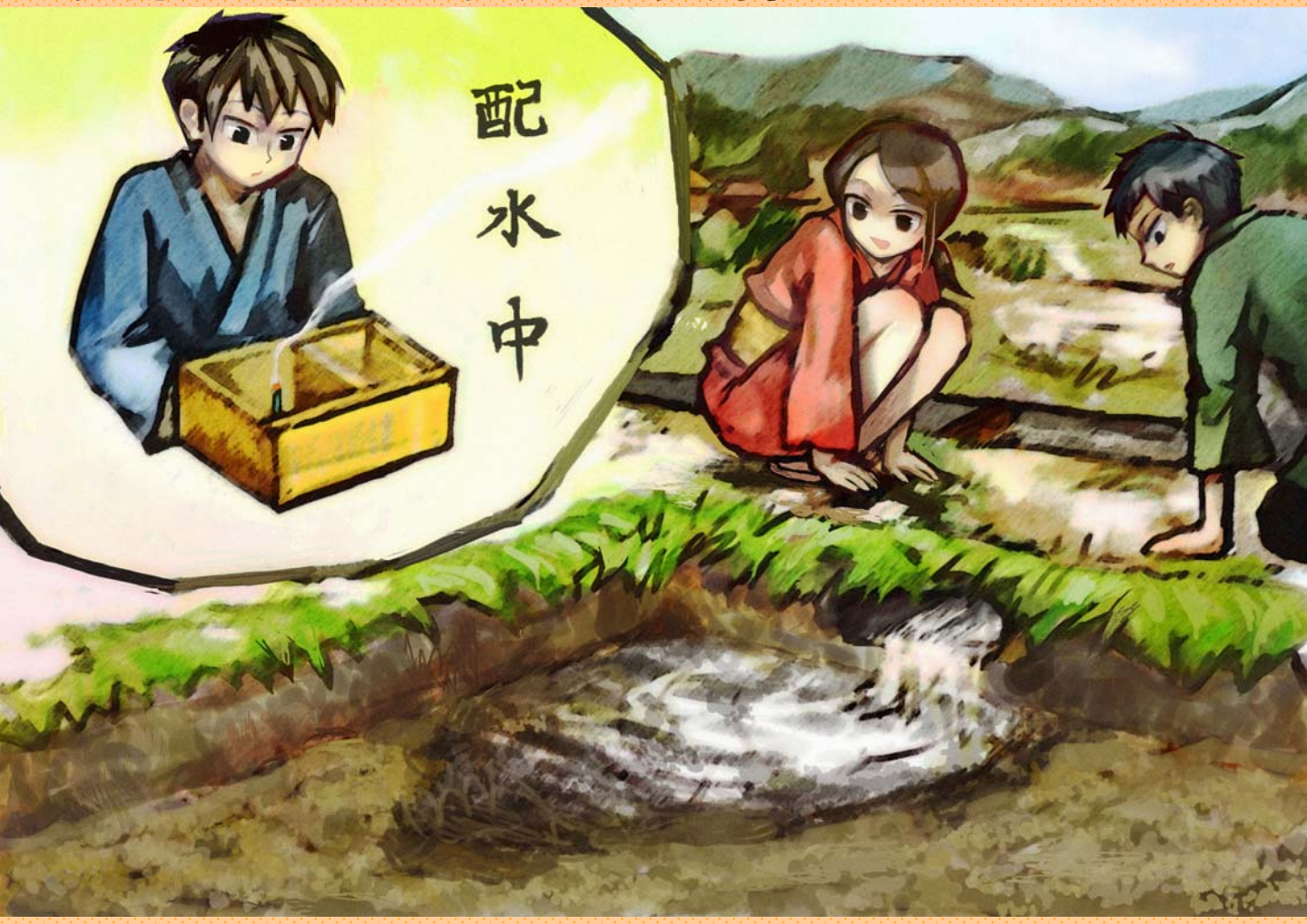
昔から、渇水のときは、
田んぼに入れる水の取り合い、「水争い」が起きました。
ときには暴力も・・・。

“俺のところによこせ！”
“こっちだって水が無いと困るんだ！”

太　　郎：大変だ！どうしたらいいんだろう・・・
渇水達人：これはいかん！
　　よし、こうしたらどうだろう！！

渇水達人は「番水制」を生み出しました。
番水制には「線香」と「香箱」を使います。

太　　郎：どう使うの？



まずは合図です。

太　　郎：よしっ、配水、始めー！！

その合図で、線香を燃やし始めます。
線香の長さは決まっていて、その線香の燃えている間だけ、
水が田んぼに入ります。

太　　郎：なるほどー。

一方、田んぼでは・・・

“あ、水が来た・・・！”

貴重な水が田んぼに入っていくのを、
田んぼの持ち主たちが、じっと見守ります。

そして、線香が燃え尽きたら、また合図をします。

太　　郎：よしっ、配水、終わりー！

太鼓の合図で、その田んぼへの配水は終わり、
次の田んぼへ移動します。

配水の終わった田んぼでは・・・
“まだ水が十分足りてないわ・・・”
“うーん。すまんなぁ～。
もっと欲しいだろうが我慢してくれ。
水不足だから仕方がないんだ。”
“そうよね、みんなに平等に分けなきゃ
いけないものね。”

しかし、こうやって知恵を絞っても、
渇水は何度も人々を苦しめます。

昭和14年には、ため池の水さえ涸れ、
田んぼもカラカラに干涸らびてしまうほどの、大干ばつが襲いました。

太　　郎：ため池の水も無くなっちゃったって！どうしよう！

このままでは稲は枯れてしまいます。
そのとき学校に呼びかけたのは県知事(渇水達人)。

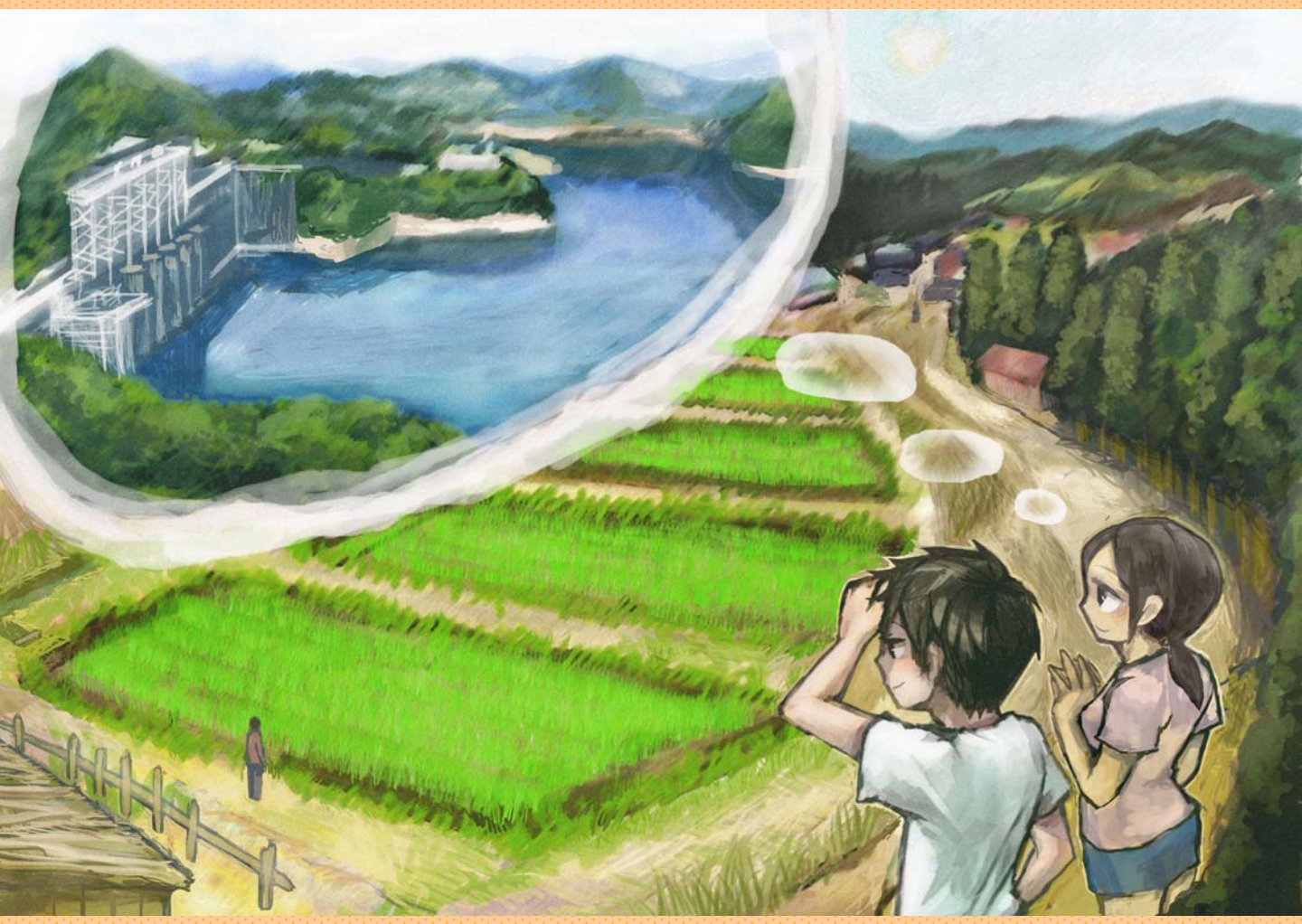
県　知　事：子ども達を集め、土瓶を持ってこさせ、
それに入れられるだけの水を入れさせよ！
それを稲にかけるんだ！

学校の先生：よし！わかりました。
それ、みんな、稲に水をかけよ！

号令で一斉に水がかけられました。

太　　郎：少しの水でも、たくさん集まると稲を助けられるんだね。
一人一人が協力したからできたんだ。

そうです。土瓶水はここぞという時の究極の知恵だったのです。



こうした工夫を繰り返し、
それでもやがて時代と共に人口も増え、
ため池だけではやっていけなくなりました。

そして、雨の多い高知県に、
ため池の何百倍もある「早明浦ダム」が作られたのです。
早明浦ダムは、「四国のみずがめ」と言われ、
多くの水を蓄えて人々を潤しました。

太　　郎：青々とした田んぼ、きれいだなぁ・・・
これでたくさんのお米ができるね。

そうです。お米ができるのも、水のおかげなのです。

太　　郎：ダムは水の貯金箱だな！！

ですが、平成6年、
また渇水で早明浦ダムの貯水率もゼロになってしまいます。

太　　郎：えーー！！

しかし、台風が来て、
ダムは一気に大量の水をためて満杯になりました。

太　　郎：よかった！

この時の渇水をきっかけに、早明浦ダム周辺では
中学生による植樹が行われるようになりました。
木は水を抱え込んでくれるのです。

“ふー、太郎、何本植えた？”
太　　郎：10本植えたよ！
　　大きく育って渇水を助けてくれるといいね！
“そうだな！”

ダムができた今でも、
水はいつ絶えるか分からない、大切な資源です。

太　　郎：そうだね。
こうして今まで苦労してきた人たちが
たくさんいるんだもん。
それを知って僕らも水を大事にしなきゃね。
節水だね。

その通りです。

太　　郎：考えたら、普段でも色々できるよね。
お風呂の水を洗濯に使ったり、
食器のため洗いとか。

蛇口に付ける「節水コマ」などもあります。
先人と水に感謝して、大事に大事に使いましょう。